

ヤガヤ楽しく言って帰ったものであるが、この参拝がいつの頃中止になってしまったかは記憶にない。

小学校5・6年生にもなると、体操の時間には武道・剣道・空手・銃剣術が多く取り入れられるようになり、防空頭巾をかぶって防空演習もやるようになった。

寒中に、1週間ぐらい裸足で登校もした。中学は、大阪の都島工業中学校に入学と決まったが、米空軍の空襲激しくなり、通学が無理となり、貝塚実業学校に入学したがほとんど勉強できず、英語ABCの活字と単語を少し習っただけで、後は勤労奉仕ばかりであった。

食料増産で校庭の半分ぐらいを島にし、  
一、島の肥やしにと2人1組で肥桶を担ぎスコップ1丁をもって貝塚市内にある馬小屋へ馬糞を拾いに行く(馬によくけられた)道路の馬糞も拾って歩いた。

一、野原に出かけスキを刈り取った  
一、島のイモを盗まれないように夜イモ番をする  
一、海岸寺山へ行き松の根を掘る

(これは松根油ーシヨウコンユーといって飛行機の燃料)

海岸寺山へ行って松の根を掘っていた天気の良いある日のこと、空襲警報となり空を見上げた。米空軍B29が1機飛来。その時日本空軍の戦闘機1機がB29の横腹に体当たりし、粉々になった。B29は薄煙を吹き、高度を下げつつ和歌山方面へ降下していった。これを見ていた生徒全員はどのように思ったか。一人も声なし。

一、貝塚市内密集家屋疎開のため家屋打ち壊し、屋根瓦は1枚つつ先に手降ろし、家屋を打ち壊す柱は1人1本重い梁は2人で1本。瓦は荒縄で振り分けて、肩で担げるように3枚ずつ後先に縛り、津田北町から海岸寺山へと歩いて運ぶ。真夏のこと故、この作業が毎日続き、一番辛かった。午後3時になると、パン1個くれる。黒に近い色をしている。2つに割ると糸

を引いて、中には黒い大豆のような物が入っていた。「酸っぱい」味がした。  
次第に米空軍の空襲が激しくなり、学校からの帰りにも米空軍戦闘機の銃撃を受け、そばの家に飛び込んだこともある。食料の配給も少なくなってきた、いもづるや草も食べる。

食べたい盛りに食べられず、夜寝てみる夢はお菓子の国へ行ってはいる夢ばかりであった。夏でも防空頭巾をかぶり、着て寝れば汗でべっとり。空襲警報の連続で浜へと避難する。

昭和20年(1945)8月15日終戦。

終戦3日後に学校へ行ったが、先生も生徒も誰一人もいなかった。これが、戦争に負けた日本の姿かと思った。  
ああ悲劇の小・中学時代。

### もう二度と戦争はしないで・・・

堺市 福田 タツ子(89歳)

昭和16年12月8日未明戦闘状態に入れり・・・

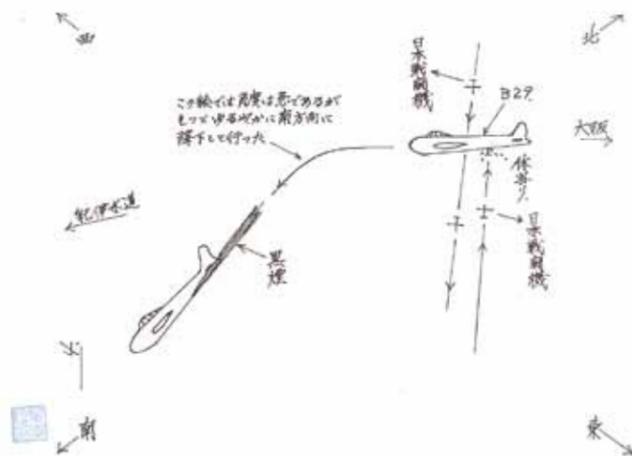
昭和12年支那事変勃発に引き続き大東亜戦争になり、国はどうなっているのかな、又どうなるのか不安でした。婦人会の人が贅沢は敵だと言いなながら町を練り歩いています。すでにパーマネントは禁止になり、町内の子供たちは

パーマネントに火がついて 見る見るうちにハゲ頭  
ハゲた頭に毛が3本 ああ恥ずかしや恥ずかしや  
パーマネントはやめましょう

贅沢は敵と言っても贅沢のしようがありません。食料品は僅かばかりの配給、衣類は切符制

**勤労奉仕**  
仕事にはげむことよって、社会や国家のために尽くすこと。戦時中は国の指導により、学校でも行事として授業の中に取り入れられた。

**空襲警報**  
敵軍航空機による空襲を市民に知らせ、被害が出ないよう発令される警報である。ラジオやサイレンなど様々な手段で伝達される。



**支那事変**  
1937年から始まった、日本と中華民国の間で行われた長期間かつ大規模な戦闘。両国とも宣戦布告をしなかったため「事変」と称する。現在は「日中戦争」と呼ばれる。

**大東亜戦争**  
1941年の開戦から1945年の降伏調印までの日本(大日本帝国)がアメリカ合衆国やイギリス、中華民国などの連合国と行った戦争のこと。日中戦争と併せて「アジア・太平洋戦争」という呼ばれることもある。

で必要な物はありません。家も1枚のタオルを皆で使っていました。母と妹は車で没収されるのを覚悟で買出しに行ってくれていました。又サツマ芋のつるを落のようにゆがき煮物に、葉っぱはゆがき細く刻みわづかなメリケン粉とまぜ、パンのようなダンゴのような、でも私達はそれで飢をしのぎました。何を根拠に贅沢をやめる様に言ったのでしょね。空襲警報が頻繁になり、夜は電燈に黒い布をかけ、ひっそり暮らしました。

昼は防空頭巾にモンペ姿でバケツリレー消火訓練町へ出れば千人針の布を持った方達。御家族に、出征された方がおられるのでしよう。千人針の布の真ん中に、五錢玉(死戦を越えて)、十錢玉(苦戦を越えて)と言う意味で縫いつけてあります。私も武運長久を祈りながら一針一針縫いました。又友達と慰問袋を作り戦場の兵隊さんに送りました。

20年2月27日は、彼から大きな写真と手紙が届きました。

(手紙一部抜筆)

貰い手がなければ帰ったら俺が拾ってやる

「貰い手がなければ俺が拾ってやる

いいし君今靖国の人」

因みに(軍艦大和)に乗っていました。

この手紙が来て間もなく、3月13日大阪大空襲にあい、パラパラ落ちてくる焼夷弾の火の粉を避けながら頭からふとんをかぶり、弟と2人近くの公園の防空壕にげました。弟は明日14日小学校の卒業のため疎開先から帰って来ており、前日から熱を出し2人でねていました。

又姉が1月に息子を亡くし家へ帰ってきており、同じく戦火にあいました。義兄が徴用で呉に行っておりましたので、姉も広島に行くと言うので止めませんでした。まさかあんな恐

ろしい原爆が落とされるとは夢にも思いませんでした。姉は死に行ったようなものです。両親は生前それをずっと悔やんでいました。

何のために戦争をするのかな。この戦争は何だったのかな。こんなみじめな辛い苦しい生活は、子供孫達にはさせたくない。私達で終わりにしてください。うそのような今の平和な生活。もう二度と戦争はしないで…。

原爆も原発も根は同じ核物質です。再び過ちをおこさないで。

## 戦争は大切な人をかえらぬ人に

羽曳野市

高井

君子(90歳)

私は、大正12年3月4日生まれで、現在90歳になります。昭和4年の1年生から、昭和10年の6年生卒業まで、だんだんと戦争にすすんで行くように思えて日を送るうちに、20代になってくると、あちらこちらの家から兵隊に行く人が目立ってきました。いとこも赤紙がきて行きましたが、その内に戦死の報せがきて、叔父さんは箱の中には紙だけが入っていたと泣いていました。私も軍需工場で働いていましたが、プレスで指の先2本を落としました。他の人も2本・3本と指を落としたりしました。がんばっているうちに夕方になると、サーチライトが夜空に何本も光り、晝間は防空壕に入って、空襲解除になるとまた仕事にかかり、日々に食料も乏しくなっていました。兄が風邪をこじらせて手術をした時には、食料事情は底をついた形で、弱る一方で、とうとう亡くなりました。また工場の係長の人が杭全の方に空襲の消火に行き、油脂焼夷弾と知らずにほうきではいておこられたと言っていたので、これからどうなっていくんだらうと皆不安になりました。そのうちに配給も少

**千人針**  
第二次世界大戦まで日本でさかんに行われた、多くの女性が一枚の布に糸を縫い付けて結び目を作る祈念の手法、および出来上がったお守りのこと。武運長久、つまり兵士の戦場での幸運を祈る民間信仰である。



**赤紙**  
戦時中の日本の兵役制度において、在郷軍人を兵として召集するために用いられた命令書である召集令状。紙の色が赤かったため、俗に「赤紙」と呼ばれていた。

**油脂焼夷弾**  
焼夷剤に、ゼリー状にしたガソリンを主成分とするものを用いた焼夷弾。